資料

社會主義的人口論への一つの手引き

―カウツキー晩年の人口論著について―

本多龍雄

分節目次

一、序言
二、一般生物界における増殖法則
三、人間社會における増殖過程の特性
四、生活空間の擴大過程と人口増加速度の推移に關する史的展望
五、近代資本主義社會における人口問題
六、將來社會主義社會における人口問題
七、結語

一、序言

社會主義には人口論がないという通例の批難は人口問題の立地をその自然生物學的な内容への反省の中にもとめそこに凡ての社會經濟問題から獨立した超歴史的な問題點があると考える極めて自然ではあるが、それだけに、また極めて率直で一面的な態度を前提とした批難で、人口問題の社會經濟的な制約關係を强調し人口法則なるものの歴史社會的特性を力説するマルクス主義的社會主義の理論體系にそういういみでの獨立した人口論がないのは寧ろ當然といわねばならぬ。が人口問題は本來多分に生物學的内容を含んでおり、人口法則なるものの歴史社會的本質を力説するためにも一應はそのような生物的自然の世界にも觀察の視野をひろげ、問題の本質が人間社會の成立と共に新しい推移と轉換を餘儀なくされる所以を明らかにするところがなければならぬ。そして人口問題のかゝる全面的な展望が缺けていたというういみでは右の批難も亦必ずしも理由がないわけではない。資本主義社會における過剰人口の必然性を資本自身の運動法則から解析したマルクスの論斷は問題の史的唯物論的なとりあげ方をその最も核心的な所在點において範示したものではあるが、各史代にわたる問題推移の史的展望はなお取り殘された課題であつたといつてよい。人間自身の生産及び再生産は財貨のそれと表裏して歴史發展の基本動力であることに着目するのが唯物史觀の根本前提だと定義したのはエンゲルスであつたが、彼自身この提案を具體化したわけではない。そしてエンゲルスが科學の無限の進歩と社會主義的社會における人口收容力の無際限な擴大可能性を力説するとき、この極端に樂觀主義的な態度は社會主義的信條の告白として正當でもあり典型的なものでもあるが、歴史の進行はやはり物の生産及び再生産の面からだけ考えられている。恐らくそれが唯物史觀當然の行き方で、人口の推移を經濟の發展と並んだ獨立の能動因と考えることが唯物史觀の方法論的一義性を侵害するものであることはいうまでもないが、しかし又社會經濟的發展の規制すべき最も基本的なる資料因として之を理論的分析の主題に取り上げることは、社會主義的理論闘爭の一論題としても無視することのできない重要課題の一つでなければなるまい。かゝる理論的要請に答える唯一の文獻として我々はカウツキー晩年の論策「自然と社會における

増殖と發展」(Vermehrung u. Entwicklung in Natur u. Gesellschaft, 1910)を擧げることができる。その所說の凡てが果してマルクス主義的社會主義者の完全に承服するものであるかどうかは問題の性質上當然の疑點があり、またその論旨の一部には修正主義的な妥協と弱氣の跡もないではないが、しかしマルサスの人口論に降服した所謂修正主義者とは飽くまで別である。そういういみで右論策は最も穩當にして全面的な社會主義的人口理論といつてよく、社會主義的人口論への一應の手引きとしてこゝに其の大意を紹介する次第である。

なほ本著書の成立にはカウツキーの一生涯にわたる因緣があり、それを知つておくことは本著述の內容を理解するためにも無駄ではない。その青年時代、まだマルクス主義的社會主義の陣營に參加する以前のカウツキーは深くダーヴインの影響下にあり、ダーヴイニズムと社會主義とを綜合することをその研究の目的としていた。一八七五年發表の「頭腦勞働者の立場より見たる社會問題」と「ダーヴインと社會主義」(共にライプティヒ「フオルクスシユタート」誌)の二論文はこの青年時代の野心的試みであるが、特にマルサス人口論についてはなお通り一遍の社會主義的批評を行つているにすぎない。ところが彼がダーヴイニズムに深入りすればするほど人口問題に對する社會主義的態度に不滿を感ずるようになり、その點特に當時の社會勞働問題における指導的論客アルベルト・ランゲの影響を受けること尠くなかつた。社會主義に人口論なしと論難したランゲは人口問題こそすべての社會問題の最初の出發點でもあり最後の目標でもあることを强調したものであるが、カウツキーも亦マルサス人口論の中にダーヴイニズムの根本前提をみ、一般生物界における過剩增殖傾向に深く關心するに到つた。一八七八年執筆(翌年出版發禁となる)の論策「人口增加の社會の進步に及ぼす影響」はそのような思想的影響下に書かれた青年カウツキーの代表的人口論作である。その後のカウツキーはマルクス及びエンゲルスとの個人的接觸を轉機とし、典型的なマルクス主義的社會主義の立場へ立つに到つた。正統マルクス主義者として「ノイエ・ツアイト」誌を創刊したのは一八八二年のことである。が正統マルクス主義の理論家としてのカウツキーは永く人口問題に觸れなかつた。が晩年たま〳〵その舊作人口論が當時のマルサス主義再燃の時勢に乘つてロシヤで飜約せられたばかりでなく之に原著者の序文をのせることを請願せられるにおよびカウツキーはこの舊作が社會主義的人口理論として諒解されることを怖れて新しく正統マルクス主義の立場からする新著作を決心するに到つた。それがこの「自然と社會における增殖と發展」の一卷で、いわば彼の生涯を貫く人口問題研究は幾變遷を經てここに最後的の集成をみたことになる。

右の如き本著成立の事情がその內容論旨にも舊著と對照的な力點を與へるに到つたことは當然で、彼自身その序文の中で青年時代の舊作を若氣のあやまちとさえいつている。一般生物界に適用されたマルサス主義がダーヴイニズムとは全く別物であることを力說詳論していることも新著の對照的力點を示すものである。とはいえ社會主義に人口問題の全面的な論述が缺けているという嘗ての考えは前後を通じて一貫する思想であり、正統派マルクス主義の立場を堅持しながらもその問題視野をひろく生物學的世界にまで擴大しようとする努力はそのあらわれの一例といえよう。新マルサス主義的な產兒制限思想についても未來の社會主義的社會における新しい諸條件と新しい目的との下での新しい存在理由を明らかにしようとしており、社會主義の立場からする人口問題の最も穩健妥當にして全面的な論述として遺憾ない體裁をそなえている。全篇十七章。但し以下論述の分節順序

等はすべて筆者の適宜に行えるものである。

二、一般生物界における増殖法則

マルサスの人口論はその根本命題を一般生物界に共通な根本事實と考えられるものから導いている。それは凡ての生物はその生活資料を超えて増殖しようとする不斷の傾向を有するという考えて、從つてまた増殖を規制するものはこの生活資料の不足であるという考えである。カウツキーのマルサス批評はまづこの事實の眞僞如何の檢證からはじまる。ところでこの問題についてはダーヴイニズムの自然科學的權威がマルサス主義に極めて有利な判決を與えるように考えられている。ダーヴイン自身がマルサスの名をあげ、自說を以つてマルサスの理論を一般生物界に擴張したものだと述懷してさえいるのである。がカウツキーにいわせるとダーヴイン自身の述懷は別に證據にはならぬ。そして實際においては一般生物界に適用されたマルサス主義はダーヴイニズムとは似ても似つかぬものである。蓋し無際限の増殖傾向からダーヴインの導きだすものは生物種の不斷の進化の事實であるが、反之、マルサスの結論するものはプロレタリアの窮乏と墮落である。從つてダーヴインの說くところは同種の個體間の鬪爭即ち適者生存の事實であり、更に種全體の他の生物種に對する乃至は一般的な危險に對する鬪爭の事實であるが、反之、マルサスは同種個體間の食糧の爲の鬪爭と之に伴うその弱化と退化をしか說かない。即ちマルサス說は自然界の事實には當てはまらぬわけで、從つて無際限の増殖傾向を規制するものは食糧の不足であるという主張も亦問題となつてくる。というのは生物種の増殖力なるものはもと〳〵種の生命に對する危險、他の生物種に減されるか乃至は天災地災等の一般的な危險に對應するものであつて、食糧關係は決定的な要因ではないからである。カウツキーがここで觀察の對象を抽象的な個體にではなく種全體に、更に進んでは種相互間の全體的聯關に置くべきことを强調し、一個の個體又は一組の雌雄を抽象してその増殖傾向を論ずる通俗的非科學的態度の方法論的缺陷を指摘しているのは確かに傾聽すべき忠告で、經濟學における價値法則の究明と同じく、生物學的増殖法則も亦そのような個別的現象的な外觀を超えた本質必然的法則として究明されるのでなければならぬ。

そこで全體的聯關から反省してみると事象は正反對の樣態をさえ展示してくる。というのは榮養需要者としての生物も他の生物に對しては、全部的に乃至は少くとも部分的に榮養供給者としての意味をもつものでなければならぬからで、そういういみでは尨大な食糧需要増大の傾向は同時に尨大な食糧増加の傾向でもあることになる。だから若し假りに生物界に子供は二人までというような主義が實行されたとしたら生物は立ちどころに食糧不足に撞着することにならう。戯談はともかく、生物は何よりも先づ他の生物の食糧となるために、その他天災地變等による一般的な危險のために、その生命を破滅せられる危險に當面しており、かゝる破滅的傾向に對する對抗手段としてこそ諸種の對抗的諸特性の發達をみ、特に高い妊孕力をも有するに到つたものでなければならぬ。いゝかえればその増殖力は本來そのような危險に對應したもので、食糧の限界を不斷に超えようとするといつたような性質のものではないことになる。食糧不足による生物死滅の事實も勿論ないことはないが、それらは多く局部的例外的な現象でもあり、またその原因は過大な増殖力のためというよりも寧ろ環境の急變にあるものであることをカウツキーは注意している。要之、生物的自然の一般的法則としてはマルサスの人口法則は完全に無意味であるというのがカウ

ツキーの批評の骨子である。

尤も生物界には象や獅子や虎などのように他の生物を食料とするが他からは食はれることのない猛獸もいる。これらの場合にも過大增殖の杞憂がないことは生物の增殖力がその個體と種とを保存する力と之を破壞する力との間の均衡を保つように保持されている證據であり、結局すべての歸着するところは自然における均衡 das Gleichgewicht in der Natur の存立である。

人間を除く一般生物界には、そして人間がこれになお手を加えない範圍においては、種の生命の保存と破壞の二つの力は全く均衡を得てゐるのが自然法則的な常則で、增殖力も亦生命保存のために大事な一つの力としてかゝる均衡法則の下に立つているという右の主張をカウツキーは特に唯物論の立場から次のように說明している。生物現象はすべて外的諸條件を土臺として成立するものでなければならぬ。從つてこの地球上の最初の原生物發生の事情を考えてみると、それは氣溫、濕氣など一聯の好都合な諸條件の成立を前提としたもので、從つてそれは到るところに同時に發生したものに相違ない。從つて又それはその發生と同時にその榮養空間を完全に充足してしまつたものと考えざるをえぬ。また假りに百步を讓つて地上の最初の生物的生命は他の天體から飛來して來たものと考えても、原生物の巨大な蕃殖力は直ちに地上の榮養空間を充足して了つたものと考えざるをえぬ。そこでかゝる原生物のみの世界にとつては唯その一部の死滅によつてのみ他の個體に對する新しい營養補給の途は拓かれるわけで、その生命破滅の量は營養補給の量に一致することになり、そしてこの均衡がその增殖力を決定することになる。事實またアメーバの分裂蕃殖はその營養補給に完全に依存し相應しているといつてよいのである。尤も生物の進化と發展につれてかゝる關係はいよ〳〵複雜となるばかりでなく、生命破壞力と營養の補給と增殖との三つの要素はそれ〴〵獨立化する傾向を生じ、從つて又その間に種々の過不足が生ずることにもなるけれども、しかし生物界全體として右の如き均衡關係は永續的に妨げられることを許さず、個々の生物種に對して飽くまでその原則的法則性を貫徹するものでなければならぬ。即ち妊孕力が過小な場合は種の絕滅を結果するが、過大の場合にはかかる種を食料とする他の種生物が增大することによつて均衡は回復せられる。そしてかゝる敵對關係に立つ他の生物のない場合には過大妊孕力は却つてその種の自滅を結果するわけで、結局は均衡關係に立つものだけが生存權を確保することになるというのがカウツキーの意見である。從つて事實また進化の進んだ且つ强力な動物ほど實際に增殖力は低いことをカウツキーは種々の例をあげて示している。例えば象は二〇ヶ月におよぶ懷妊期間と二〇乃至二四ヶ年の生長期間をもつている如きで、そこに自然的均衡關係は維持されているというのである。どうしてそのような均衡が實現せられるかについては個體の進化と個體保存のための力の增大が妊孕力の低下を結果するというスペンサーの說を援用し、特に體量の增大に伴う運動エネルギーの加速度的增大が妊孕力の低下を伴わざるを得ないことなどを種々詳論してるが、スペンサーの說には專門的に異論もあり、また自然的均衡論にとつてその生理學的說明の如何は本質的な問題ではないともいえよう。唯物論の立場からいつて特に首肯し得る說明はカウツキーが妊孕力の相違をその生活方法の差異より論じている說き方で、例えば野生の牛馬は子供を危險から陰蔽する場所がないために生まれるとすぐ群居移動する必要があり、そのために懷妊期間が長くなり、子供數は少くならざるを得ないといつたような關係である。また巢を造る習性をもつた魚の產卵數が

一般に産卵數の極めて多い魚類中にあつて特に尠いことなどもその著例の一つとなろう。要之、生物界にあつては適者のみがその種の生命を維持し得るのであるが、謂うところの適者とは營養空間の限度を乘り超えようとする增殖力をもつたものゝことではなくて、寧ろかような限度にはなお達しない適度の增殖力を維持していて、そのために個體の十分な發達が可能となり、置存と增殖との間の均衡が永續的に推移せられるものゝことでなければならぬというのがカウツキーが所謂均衡論の名目の下にマルサス的自然觀に對置しようとする反對論旨に外ならぬ。

三、人間社會における增殖過程の特性

生物的自然界の實情は以上の如く、こゝにマルサス主義の根據を求めるのは全く無意味であるが、人間社會はまた獨特の發展法則をもつたものでなければならぬ。自然と社會との異同を辨別することは唯物史觀の根本命題の一つであるばかりでなく、特に人口問題の解明に際して大事な最初の仕事でなければならぬ。人間社會の發生と共に現われてくる新しい要素は人間による技術的作爲の介入で、人間は自分の生活空間を自分の力で擴大しながら自然の均衡を攪亂しはじめることになる。人間は自然そのものを變革するのである。とはいへ如何に革命的な技術的變革と雖も全宇宙の廣大さに較べてはその極小部分に係はるに過ぎない。にも拘らず此の極小部分の變革もそれが人間社會卽ち人間の共同生活形態の上に及ぼす影響は絕大で、そういうみでこそ自然を永遠とみ社會の本質をその歷史的變革性にみる普通の考えは一應の正當な理由をもつている。

が技術の進歩が人間社會に及ぼす影響は極めて複雜である。それは勞働の生產性を增大させるけれども、必ずしも常に勞働の需要を增大するわけではない。例えば技術の進歩は農業における剩餘生產物を增大させて非農業人口の增大を可能にもするが、しかしまた單に農業勞働の負擔を輕減するにすぎない場合もある。その結果の如何は社會經濟形態と密接な關聯に立つているわけで、技術の進歩という新しい要素の介入によつて可能となる人間社會の人口收容力は極めて不規則な、變轉極りない發展の途を辿るものでなければならぬ。いゝかえればマルサスのいう農業生產の算術級數的增大などということは全く意味のない架空の抽象でなければならぬ。過去の史實にみても人間社會の生活空間は數千年の永きに亙つて停滯し乃至は時に狹化したことがあり、また反之、ときに飛躍的な擴大强化を實現した時期もある。特に近代についてみると技術の進歩に伴う農業生產の增大は優に人口增加の勢を超えており、マルサスの人口論が憑據する第二の前提、農業における收穫遞減の法則はこゝではまだ作用していないことをカウツキーは統計的數字をあげて論證している。勿論カウツキーも技術の夫夫の發展段階には夫々固有の最高能率限度があり、また將來における技術の進歩は專ら勞働の生產性を高めるのみで勞働需要を增大しなくなるような狀況に達するかもしれないことを考慮するに吝かでないことは後段にも再說する折があるが、それは別として、人間社會の歷史における生活空間擴大の過程は農業生產の算術級數的增加說や乃至は收穫遞減法則のいうような單純な過程にあるものでないことだけは疑いない。

要之、人間社會の成立と共に導入される技術的作爲という新しい要素は舊來の自然的均衡を攪亂するものであるばかりでなく、それはまた人間社會の發展に、そしてとりわけその人口現象に自然法則的な一義性のない獨特の歷史的性格を與える。そういうみでカウツキーは史的發展段階の相違による人間的生活空間の變遷の跡を問ひ、これと表裏する人口增殖の緩

急過不足の跡を明らかにして、人間社會の各發展段階は夫々固有の人口法則をもつというマルクス主義人口論の根本命題を實證すると共に、生活資料の算術級數的增加や人口の幾何級數的增大傾向などを據りどころとしたマルサスの抽象的人口法則が實際的に全く意味のないものであることを確證しようとするのである。

四、生活空間の擴大過程と人口增加速度の推移に關する史的展望

地球を取り卷いていた雲霧が消散して太陽の光線が猥なく地上に透過してくるようになつたとき、そして大地がその生活に好適な場所となると共に、原始森林の樹上にいた猿人どもは地上に降りてきて果實や魚介を常食とするようになつたに相違ないが、この生活樣式の變化は何よりも先づ步行運動を習性づけ、そして手の解放は進んでは武器や道具の發明を可能にしたものと想像される。卽ち原始人類はこゝに生まれたわけで、人間の誕生を象徵するこの武器の發明は人間を野獸狩りに驅り立てることによつて人間の食範圍を異常に擴大したばかりでなく、又その衣服資料の提供を通じて人間の居住地域を北寒地帶へまでも擴大した。人間發生の原始的事實そのものが既にその生活空間の異常な擴大と不可分に結びついているわけである。そして又その當然の結果である人口增加は時には局部的な過剩人口狀態の發生をさえみたと想像してよく、この人口增加も亦人間發生の原始的事實を象徵する事件といつてよいものである。というのは當ての猿人たちは外的諸條件の成熟につれて地球上の諸方に多元的發生をみたものといつてよく、從つて又その增殖力は自然的均衡を常則とし、その總數において增減なき一定數を維持する傾向をもつていたものと考えられるからである。人間への進化と共に人口增加の事實も亦はじまり、增加するがゆえに又その緩急過不足の問題も亦はじまることになるわけである。とわいえ原始人の增殖速度はなお極めて緩慢であつたとみてよい。しかもそれは、カウツキーの强調するところによれば、決して食糧の不足のためではなく、寧ろその生活樣式の變化に歸すべきもので、植物性食物をとつていた原始林から野獸狩りの原野へ出てきたための不斷の緊張と缺乏とがその增殖力を低下させ、そして屢〻人口絕滅の危機にさえ立ち到らしめたと想像される。かゝる推定の傍證としてカウツキーは狩獵民族における性的冷淡さの事實をあげているが、この原始人の低增殖力の解明に際しカウツキーは特に力點を女性勞働の問題におき、女性勞働の過重がその妊孕力を著しく低下させたに相違ないとしている。いずれにせよ或る報告によれば、蕃人の女は二十五歲位で老境に入り三十歲では既に妊孕力をもたない。且つその短い妊孕期間內でも子供に適當な食物の不足せるため授乳期が長く三、四年は續いており、それがまた一層その妊孕力を狹隘化しているという。右に加へて更に原始人における近親交配の事實がその增殖力に破滅的な影響を與えたであろうことは今日の動物實驗が遺憾なく證明しているところである。この弊害は男女分業の成立が社會群の狹隘化傾向を强くすることによつて特に致命的なものとなつていつたとみてよく、女性の勞働役割りの增大化に伴う女權社會の生成と共にそれは愈〻甚しくなつたと想像せられる。

かゝる弊害の種族的經驗が特定の社會的制限を伴う婚姻習俗へと發展していつたものであることは周知のことであるが、この婚姻習俗こそ人倫的感覺によつて受け入れられ、又かゝる人倫的感覺を介して貫徹せらるに到つたところの種族保全の要請に外ならぬのである。その時以來今日に到る

まで性關係が人倫道德の、從つてまた非道德の、中心的領域を形成しており、そして人口增殖力の强力な一素因として働いているものであることはカウツキーの强く指摘するとおりである。それは增殖力を社會的利害に順應させるための最も適切かつ有力な力ではあるが、併しまた社會的利害の變化にも拘らず直ちに之に適應することを欲しない保守守舊的な持續性をもつており、そして人口增加に時に妨害的に、時にはまた速進的に作用することになる。マルサスの人口敎說が人口增加を忌避した小農民階級の性道德を理論化せるものであることは後段再說する如くであるが、それはともかく原始社會における性道德の成立は寧ろ人口をその破滅から救うための社會的要請として必要であつたことをこゝでは特に强調せぬばならぬ。

人間社會の生活空間は原始自然人の狩獵生活を去つて文明の最初の光を浴する牧畜時代に入るに及んで更に劃時代的な發展をとげた。そして人口增殖力の上にも同樣の劃時代的な轉機が認められる。特に婦人勞働の輕減と榮養資源の規則的恒常化、特にまた牛乳による授乳期間の短縮など一聯の好條件は遊牧的畜牛伺育時代にはじまり農耕的定住生活の初期に到る時代の人口增殖力を劃時代的に增大せしめたと想像される。鍬の使用は農耕勞働を男性の仕事に轉化し、農耕的定住生活の開始は剩餘生產の可能性を齎した。家族奴隸の發生をもみるのもこのときである。かゝる生活樣式下の高い妊孕力を傍證する實例としてカウツキーは南アフリカにおけるカツフエル族及びブール族がなほ狩獵的段階にあるホツテントツト族に對比して極めて對照的な高妊孕力を示しているという十七世紀末バロウの報告を引用している。またスペンサーが引例しているカナダのフランス人も同樣の經濟生活段階にあるもので、その子供數は平均八乃至十六人を數へ、時には二十五人もの多子者もみられるという。この多產が民族的特性に歸すべからざるものであることはフランス本國を思えば十分であらう。その他、民族大移動期の以前よりその大移動期にかけてのゲルマン民族や、イスラム敎發生後百年間の西はスペインから東は印度へまで擴がつていつたアラビア人など皆その社會經濟的背景をひとしくするものであることをカウツキーは强調している。

農耕生活とその技術的發達が全歷史代を通じて生活空間を著しく擴大したことについては縷說するまでもない。カウツキーも引用しているラツツエルの一千方粁當り人口收容力の推定數字の一端を揭げてみても、北方貧瘠地帶の狩獵種族や漁撈種族において二乃至五人、ステツプ地帶の狩獵種族(ブツシユマン及オーストラリア人等)で二乃至九人に過ぎなかつたものが、若干の農耕を伴う狩獵種族(インデイアン及グヤス族等)になると一七〇乃至七〇〇人となり、內部アフリカ及南東アジアにおける若干の手工業を伴う農耕種族においては一、七〇〇乃至三、三〇〇人となるといつた狀態である。更にキリスト世紀以前の北方インドゲルマン農耕種族及び牧牛種族においては三、〇〇〇乃至一二、〇〇〇人、三農圃制をとれる一歐諸國にして都市發生の初期にあり適當な森林資源をもつ場合、例えば紀元前四世紀のギリシヤや第一——五世紀の中歐等については一七、七〇〇乃至二六、六〇〇人を算えるに到る。現今の印度、ジヤワ、支那の優良農耕地帶が一千方粁當り一七七、〇〇〇人を收容していることはこゝでは引用する必要さえないかもしれない。

農耕經濟による生活空間の擴大は特にそれが都市的手工業者と相互扶助的關係に立つ場合一層顯著であるが、しかしそのような共榮關係はカウツキーによれば一種のユートピア的幻想にすぎぬ。歷史上の事實は農民の福祉がその非武裝化と相伴い、その結果は農民自身の頹廢過程へ、いゝかえれ

ば搾取的貴族制度の發生への途を必至とせざるを得なかつたことを示している。その實際の成り行きについては或は農民が近隣未開種族によつて奴隷化される場合もあり、侵入種族に征服されて臣下となる場合もあり、また農民自身が階級分化して自ら武裝化する場合もある。乃至は都市の發達に伴つて之に搾取される場合もあるが、孰れにもせよ生活空間の擴大は同時にまた收奪と隷屬の擴大の歴史であつたといえる。農民にとつての最善の形態はその支配者が地方的豪農として餘剰生産物を自ら消費していた程度の時代で、その支配者的横暴も狩獵權や初夜の權利ぐらゐに止まつていた間である。がそれも支配者が都市の生産物への欲求をもつてくるようになると直ぐに事情が變つてくる。そして收奪の進行は農業技術の進歩を停止し、飢饉等の頻發と相俟つて生活空間擴大過程にとつては戰爭以上の新しい妨害的要素となり、それが時には完全な破滅的結末にさえ到らざるを得なかつたことはローマの史實の示す通りである。そしてかゝる破局的狀況からの解放はローマの場合にみたように他民族の侵入によるか、乃至は近代フランスに見るように自らの革命によつて之を行はざるを得ぬ。要之、生活空間の擴大過程は極めて複雜で、農業生産の算術級數的增大などということは何處をさがしても見當らぬというのがカウツキーの史的考證の示そうとするところである。

右の如き階級社會の發生が人口增加に對して如何なる影響を及ぼしたかをみる。狩獵時代と異なり支配者階級以外の人口が戰爭の負擔から解放されるに到つたことが人口增加に好都合なものとなつたに相違ない初期時代を例外とすれば、階級社會の發展は階級的支配下の小農家族の妊孕力を減退傾向へ導いたと考えられる。特に典型的な場合は奴隷經濟下の人口減退で奴隷の懷妊がその主人にとつて勞働力の竊盜と考えられていたことは周知のことである。從つて奴隷經濟は不斷の奴隷略奪の下にのみ可能であり、奴隷略奪は人口餘剰をもつ農民的經濟の存在を前提としていたわけである。階級的收奪下の農業過剰人口はそのはけ口を農民的移住が都市への流亡に求めたが、更に餘儀なき自己統制の方策として取り入れられた手段こそ私有財産制度を背景とした避姙と人工流産とで、マルサス主義の採用し說敎するところの道德、所有階級のみ結婚すべしというその道德はかゝる發展段階における農民道德に外ならぬ。いゝかえればマルサス主義はかかる段階の農民經濟に伴う技術的、知能的、竝に道德的の狹隘性を自然法則にまで聖化するものに外ならぬとカウツキーはいう。

都市手工業の發達は農業生産性を增大させたが、しかし收奪の强化が却つて農業の技術的進歩を破滅的な停滯狀況に陷れたことは十八世紀のフランス農民に見られるところで、フランス革命の因由するところも亦そこにあつたといえる。他方この時代の都市の手工業者たちも農民の性道德を受け入れたのはいうまでもない。たゞこの時代の都市に人工的な産兒制限がなかつたのは當時の都市の殺人的な高死亡率のためで、その結果都市が農村からの不斷の人口流入を必要としていたことは周知のことである。人口の幾何級數的增加などは思ひもよらぬ。數世紀の永きに亙つて人口は所謂封建的停滯をつゞけた。生産技術の進歩がなかつたのではない。封建的な階級的收奪が生活空間の擴大を許さなかつたのである。

五、近代資本主義社會における人口問題

近代産業革命とその集約的表現である政治革命とが切りひらいた近代世界の實相、その生活空間の劃時代的な擴大と史上未曾有の人口增加とについては詳しく語るにも及ぶまい。我々の住んでいる現在の事件でありカウ

ツキーも特別の紙幅をさいてはいない。が近代資本主義社會における人口問題の一中心點である近代的差別出生率の問題についてカウツキーが敍上の如き史的展望下に解釋するところをみると次の如くである。

即ち資本家階級の寡産についてはカウツキーは之を財産の細分を恐れる經濟的理由と並にかゝる階級の女子の生理的弱小化に歸しており、共に階級的史觀を背景としながらも經濟的解釋と生理學的解釋とが併用されていゝのが注意をひく。從つて人口の壓倒的部分を占めるプロレタリア階級についてもカウツキーは資本家的收奪下の過勞が、特に女性の家庭外勞働という人類史上劃時代的な現象を媒介として、當然に妊孕力減退の傾向を伴わざるをえぬ筈であるという。それは嘗て原始狩獵種族の場合に見られたのと同一の傾向であるべき筈のもので、環境の相違は例えば乳兒用ミルクの大量生産というような一事例にも覩はれるけれども、理論的にはさう斷定せざるを得ぬという。しかも事實そのような傾向が看取され難いのは、カウツキーによれば、第一には、なお世代が若いことで、プロレタリア階級の日常生活上の劣惡なる諸條件も未だ早期老耗化を結果するほどの症狀にまで立ち到つていないからである。また、第二には、不斷に農村からの健全な血液補給があることも注意されてをり、資本主義經濟の存續はこの人的補給の可能性とその運命を共にしているとさえカウツキーはいつている。その他、直接の社會心理的理由としては、プロレタリア階級に財産に對する顧慮のないこと、乃至は子女養育に特別の心配の不要なことなどがあり、結局プロレタリア階級多産の現象を生んでいるのだという。その生理學的解釋の當否は別として、今日のプロレタリア的多産の中に重大な人口危機の胚種のひそんでいることを主張する階級的感覺には一應注意を拂う價値はあろう。

また最近の文明諸國における出産減退傾向についてもカウツキーはそれが帝制ローマ時代と同じく野蠻人の高出産力の脅威として感ぜられているとし、この傾向を「福祉と文化」の結果であると說くブルジョワ人口學者の通說が結局において過剩人口は窮乏の結果なりとする新人口法則に歸着せざるを得なくなるブルジョワ的人口理論の逆說的發展を指摘している。が之に對するカウツキー自身の說明は子供の增加によつて何ら利得することのない大都市の生長、また婦人勞働の增加、新しい避妊手段の發明と普及、その他特に大陸諸國における國民的兵役義務の施行と特に之に隨伴する花柳病の蔓延等の諸事實をあげているだけで、人類の妊孕力の歷史は婦人勞働の歷史であるという立てまえから特に婦人勞働の問題に力點をおいて說いている以外には社會主義的人口理論として特に傾聽すべきものはないようである。但しカウツキーの本論執筆當時の獨逸をはじめ西歐諸國における出産減退傾向はなお深刻な人口理論的反省を要請するほどの重大な症狀にまでは立ち到つていなかつたことも考慮せねばなるまい。

資本主義下の人口問題の社會主義的見地よりする分析として特に詳論されているのはその生活空間の歷史社會的制縛、特に農業の資本主義的拘束に關する問題である。いいかえれば現在の農業がその實際上の進步にも拘らず自然科學と技術の進步に對して相對的には寧ろ後退的傾向を辿つていること、且つこの愈〻增大する後退性の因つて來る理由が農業自體の本性にあるのではなくて寧ろ土地私有と賃勞働の中にこそあることをカウツキーは微細に亙つて論じている。がその論旨は社會主義の一般經濟論として周知のもので、特にこゝに再錄する必要もあるまい。要之、土地私有は地代として農業技術の進步を妨げている。これは小作に對しては直接に地代として超過利潤を收奪して之を浪費乃至非農業部面へ流用してしまい超過

利潤を求める努力卽ち技術改善の努力を芽生えさせない。また自作農業の場合にあつても土地の私有は所有關係の交替に際し資本化された地代としてその購買價格を不當に高くするのみならず、多くの場合は抵當利子の形で之を高利貸または銀行に支拂わせることになる。農產物價格の騰貴さえ農民を利するのは當座限りで、土地所有者の交替と共にそれは直ちにその反對物に轉化せざるをえぬ。しかも土地所有關係の不斷の交替こそ資本主義下の農業の常態なのである。その他土地私有が技術の進步に伴う經營規模の擴大にとつて障害となることは周知のことである。同樣に資本主義的賃勞働は嘗ては農業勞働の根本形式であつた協同勞働を全く解消してしまい、之を賃勞働者を使用する大經營と家族勞働による零細經營の二つの形態に替へてしまつた。がブルジョワ經濟學の愛玩物である小農經營は勞働の脅迫觀念によつて勤勉を習性づけるだけであり、大經營における技術的進步の採用は勞働を節約するためにではなく唯々それが利潤を齎らす場合に限られている。現在の支配階級は都市におけるプロレタリアに對抗させる反對勢力として農民と土地所有者との保護政策をとつているが、かゝる土地所有の經濟的促進はカウツキーによれば結局において農業の技術的進步を阻む以外の何ものでもない。

六、將來社會主義社會における人口問題

農業の資本主義的制縛を說くことは將來の社會主義的社會におけるその解放を期待することであり、そこにおける生活空間の劃時代的な擴大を豫料することである。且つまた勝利せるプロレタリア大衆にとつて當然の福祉向上の要求は是非ともこのことを不可缺の條件とせねばならぬ。カウツキーはいう、資本主義は十九世紀中に特に工業と交通との劃時代的な革新を遂行した、社會主義は望むらくは廿世紀の大部分を特に農業の劃時代的革新作業に充當するであらうと。カウツキーが當時の統計的資料を驅使して讀者に展望させようとしている尨大な農業生產擴充の可能性をその數字について檢證するには及ぶまい。殖露、南北アメリカ、濠洲、印度等現在の大農業地帶の單位面積當り生產力は、今日最も技術的に進步せる英獨のそれに遙かに及ぼず、また大規模な干拓灌水工事によつて開拓せらるべき土地は北米合衆國だけについてみても十億エーカー、同國の既耕の小麥產地面積の約二十倍に當る。最も手近かなかゝる擴充事業に加えて、更にアラビア、アフリカ等の大開墾事業が殘つており、社會主義體制下における此の農業革命の世界的規模における完成には優に百年以上の年月を要するであろうとカウツキーはいつている。そしてこの期間、社會主義下の生活空間は加速化されるであろう社會主義下の人口增加速度に對してさえ更に遙かに大きな加速度的增大傾向を辿るであろうし、かゝる生活空間の擴充は今後恐らく五百年間は社會主義に過剩人口の問題を配應する必要を感ぜしめないに相違ない。要之、將來社會主義社會にとつて過剩人口問題は跡をたつというのがカウツキーの豫告する將來社會の見取圖である。しかし五百年後はどうなるか?。

五百年後に或は起るかも知れない問題について論議することはカウツキーによれば實際的興味もなければまた學問的に正鵠を期しうるものでもない。とはいへ彼はそのような疑問への解答を忌避しているわけではない。社會主義下の人口の推移をその凡ゆる可能性に亙つて考察してみることは決して無駄ではなく、特に社會主義の意圖する遠大な目標を明確にするためにも必要である。それに社會主義下百年間の生活空間擴大過程は人口增加より遙かに急速であると推定されるとはいえ、この事實は決して人間は

その自己保存に必要なものよりも更により多くを生産するものだというような自然法則の結果ではなく、また科學と技術の無限の進歩の結果でもない。それはその主因をひとえに社會的諸條件の變化に負うものであるが故に、從つて又この擴大過程の停止または緩漫化の時代は來らざるをえぬ。例えば電流の導入その他あらゆる方策を以つてする土地生産性の増大も最後には超ゆ可からざる限界に衝き當る。それ以後の技術的進歩は土地の生産性を高めるよりも寧ろ專ら勞働の生産性を高めるために作用し、人々により多くの閑暇と自由とを與えることになるわけで、それこそまた社會主義にとつての最高の目的でなければならぬ。それだけ人口増加は社會主義的理想への脅威とならざるを得ない。そういうわけでカウツキーは社會主義下の人口は果してその社會主義的環境によつて如何に規制せられ如何なる推移を辿るであらうかの推論を試みるのである。

社會主義の實現と共に人口はその増加速度を増大するであろうことは極めて蓋然性が張い。貧困の追放と福祉の大衆的普及とが死亡率を著しく低下さすであろうことは今日の差別死亡率からも充分に推定せられる。それに今日は商人、工場主等の富裕階級者さえ生存競爭のために神經を消磨しており、特にその勞働時間が一日中に亙り生活の享樂を專ら夜の仕事としてゐる非健康的な狀況においては彼等の死亡率さえ猶ほ低下の餘地はなお多分にあるわけである。勞働時間を短縮し夜の享樂に晝間の野外スポーツをおきかえるであろう社會主義社會は勞働と享樂とのより健康な諸條件を造り出すわけで、それは死亡率を低下させるばかりでなく、また妊孕力をも向上させるに相違ない。福祉と文化の向上は妊孕力を低下させるという福祉說的理論は、一部の社會主義者による贊成にもかゝわらず、カウツキーの斷乎として反對するところで、富裕階級婦人の不妊傾向はその無活動と榮養過剩、殊に夜の享樂生活の結果であり、反之プロレタリア婦人の高出産率はその早婚と自由な婚姻關係の結果である以上、經濟的配慮の勘いことに基くと考へられる。このプロレタリア的早婚と自由婚姻、今日のプロレタリア婦人の高出産率は社會主義社會においては當然一般化すべき筈のものでなければならぬ。殊に早婚と自由な婚姻關係は賣淫制度を廢絶し、性病を根絶して、不妊者の減少を結果することは必至であるとして、カウツキーは來るべき社會主義下の人口増殖力を嘗てローマ人から「バーヂナ・ゲンテイウム」とよばれた民族大移動期のゲルマン人以上のものに賈つている。

しかし又、カウツキーによれば、社會主義下の人口には右と反對にその増加に逆作用し乃至は之を規制する力として働く新しい可能性も亦生まれる。それは上掲農業革命と並んで社會主義社會の實現すべき第二の大きな仕事である婦人解放の事業と結びついたものである。女性をその家庭的雜務から解放し、その知的能力の向上を喚起し、そして種々の高度の精神的活動に參與せしめることが人口増殖力を規制する最も大きな力となるというのである。こゝでもカウツキーは再びスペンサーの理論をその傍證としているが、しかしスペンサー自身が引用している實例については社會主義者らしい疑義を表明している。即ち今日教育程度の高い女子に低妊孕力の事實のみられるのは精神的勞働そのものの直接の結果ではなくて現在の學校教育制度の非健康的な諸條件、例えば身體的運動を伴わぬ教室内での長時間の勉學など工場勞働に似た惡環境に由來するもので純粹な生理學的因果關係を示すものではないということである。また避妊法の實行により實際の生理學的事實の檢證は更に一層困難であることも指摘している。そういうわけで婦人の精神勞働强化によるその妊孕力の生理學的低下にはなお

スペンサー流の理論的假設以上のいみを附與し難いことになるわけであるが、カウツキーが特に人口の過大增殖力に對抗する規制力として婦人解放に期待するところはそのような生理學的事實にあるというよりも寧ろその心理的な效果、特に倫理的感覺の異常な强化にあるといえる。

倫理的感覺が性關係と不可分の關係をもつていることは上段史的展望においても關說されたところであるが、確かに原始社會以來結婚や出產が完全な私的自由に放置せられたことはなく、その社會的要請は一定の倫理觀として各人の行爲を規制していた。たゞカウツキーによると、資本主義社會はこの倫理的感覺を特に性的事象について極端に鈍磨してしまつた。蓋し資本主義社會は小ブルジョワ的經濟とその法制並に習俗を基礎とし生まれ、その法律及び道德觀を採用したもので、私有財產制度と結婚觀とはその雙璧をなすものであるが、資本主義の發展による條件の變化はそれらを恩惠から苦情へ轉化させてしまつたからで、小市民的社會の中でこそマルサスの敎說も敎育的意義があるが、大衆的無產化過程の進行する高度資本主義社會ではそれは全く意味のないものとなる。しかも資本主義はこの不用化されたる諸制縛を自ら完全に放棄することもできない。その結果は資本主義下の道德に二元乖離的な傾向を與え、階級分化の尖銳化は之をいよいよ甚しくする。卽ち人倫道德の普遍妥當的自明性を益〻薄弱化せざるをえないのである。社會主義社會の實現は、カウツキーによれば、新しい普遍的道德觀によつてこの矛盾を解決し、それと共に倫理的感覺そのものの異常な强化を實現することでなければならぬ。婚姻に法的合法則性の有無は最早問題とならなくなるが、しかし子孫の幸福のための配慮は却つていよいよ純粹なものとなるに相違ない。そして嘗ては非合法的結婚へ反對したその感情は社會主義社會では人口增加を規制する力としてより純粹に作用することになるであろうことをカウツキーはその唯物論的立場から期待しているのである。カウツキーの考えるこの規制力とは單に過剩人口の防止をのみ意味するのではない。出產減退のために人口衰亡の危險が感ぜられればそのような社會的要請に卽應して個々人の自發的倫理感の下に出產を增加させることにもなる其の働きをいうわけである。反之、もし過剩人口の杞憂があればそれは又これに順應するところの力でもなければならぬ。そして閑暇と自由とへの要求は社會主義的社會においてこそ愈〻强化されねばならないが故に、過剩人口への蓋然性はそれだけ又强化されるわけであるが、この過當な人口增加の抑制は、今日非プロレタリア的階級にあつて凡ての少女に對し强要されているところの義務、いゝかえれば彼女が十分な收入を持つた男性を合法的な夫として見出すことに成功するまでの間强要されるところの處女性の義務が遂行しているよりは遙かに有効にまた苦痛なしに實行されることになるであろうことをカウツキーは期待している。しかもカウツキーによれば、恰も社會主義下の生活空間の擴大が現在の技術的進步を基準としてさえ十分に推論しえたように、この倫理的人口抑制も亦すでに今日知られてゐる諸要素を、いゝかえれば今日周知の避妊技術や優生學的知識を手段として十分に解決されるところの問題に外ならぬ。

特に社會主義的社會における優生學的配慮についてカウツキーが特別の關心を示しているのはこの當來社會における人口規制の根本を人倫道德の力に求める立場からも極めて當然のことで、階級的利害の夾雜物から解放され全社會の社會的要請に想應すべき新しい結婚觀が子孫への配慮を愈〻强化するばかりでない。とりわけ社會主義社會は病弱者や不具者の保護に萬全を期することを使命とするが故に優生學的配慮の必要も亦いよ〳〵增

大するといえる。が優生學的配慮よりする避妊や斷種は、犯罪者や精神病者の場合を除いては、一般には飽くまで個々人の自發的な倫理的良心から實行せらるべきものであり、又そういう理想は唯こ社會主義的社會においてのみその實現を期待することができるというのがカウツキーの主張である。蓋し今日の上層階級にみられる避妊行爲は全く經濟的考慮から出發するもので、優生學的な配慮、況んや社會的責任感に基く罪の意識の如きは毛頭認め難い。下層階級においては一層そうである。そもそも下層階級として劣惡な生活環境の下に生活しているのに、如何して子供の惡質の原因を更に遺傳的事實にまで反省する餘裕があるであらうか。社會主義的社會においてこそはじめて惡質の子孫の發生は兩親の個人的責任として考慮せられ得る外的諸條件は與えられるのだというのがカウツキーの特に當來社會における優生學的配慮に期待する理由である。

七、結　語

マルクス主義社會主義の人口論は、自然主義的なマルサスの人口論に對する反對主張として、人口現象に對する社會經濟的要因を強調し主題化するところから出發した。マルクスによる資本主義的過剰人口の構造的分析はその先鞭をなすものであるが、それは經濟が完全に人口を規制し、勞働の需要が人間の再生産を恰も商品生産の如くに決定することを說いたものではない。ゾムバルトの所謂「經濟主義的人口理論」は必ずしもマルクス主義社會主義の人口理論を特性づける名稱ではないと思う。人口法則の歷史社會的特性を主張したマルクス人口論の基本命題は更に廣汎多岐な史的唯物論的展望を要求したものであつた筈で、以上に紹介したカウツキーの論策は卽ちこの要望に一應の解答を與えたものといえようかと思う。

從つて所謂「經濟主義的」眞味を離脫せる點において、特にまた人口增殖過程における自然生物學的要因の獨立性を無視せざる點において本論策は社會主義的人口論中特に異色あるものともいえよう。人間の自然的な妊孕力は特定の社會的要求に順應するなどと考えるのは自然科學の全經驗を否定し最も惡いいみでの目的論を驅ることに外ならぬとさえカウツキーは斷言している。とはいえカウツキーが人口問題の立場からこゝに注意を喚起するところの自然生物學的事實はマルサスの考えるような過大增殖傾向ではない。自然生物界の原則的傾向は、カウツキーによれば寧ろこれとは反對に、適正な均衡性の中になければならぬ。そればかりでない。この自然の均衡も、カウツキーによれば、實は人間が歷史的に干涉する以前の自然についてゞあつて、人間の出現と共に逆にこの自然的均衡の不斷の攪亂も亦はじまる。人間は自然を離れることはできないが、しかも同時に自然を超えたものでなければならないという人間的存在そのものゝ存在論的矛盾がかゝる攪亂の不斷の繼續を不可避とするわけで、人間の自然的妊孕力もまた自然の均衡を喪ひ、人口增殖力の不斷の過不足こそが人間社會の常態的傾向となる。

人間の技術的作爲が外的自然に對して導入する攪亂作用は特に人間の利害を中心として特定の生物種を絶滅しようとし乃至は他の生物種の過大增殖をほう助しようとするところにあるわけであるが、かゝる干涉行爲は自然的均衡を喪失してしまつた人間の自然增殖力自身を規制するために適用することができない。しかし又その代りに出てきた新しい人間的な力がある。人倫的道德性の發達が卽ちそれに當るわけで、カウツキーが人口規制力としての人倫的道德性を重視する點は人口增殖力における自然生物學的要因の獨立性を無視しないことと表裏相呼應するものといつてよいことに

なる。總じて倫理的意識は自然に對する一定の距離の意識、自然との對立的矛盾の自覺に上の成立するのである。そして自然生物學的要因への注目と倫理問題への關心とが果して人口論の史的唯物論的展開の深さと廣さをいみするか、乃至は所謂修正主義的な退歩と妥協とをいみするかは、結局は兩者の史的唯物論的な連繫と媒介に關する理論的分析の精粗當否の如何にかゝるといえよう。

倫理の强調は、それゆえに、必ずしも空疎な觀念論的倫理主義ではない。カウツキーは確固たる史的唯物論の見地に立とうとしている。また謂うところの人倫的道德性なるものも自然生物學的な力と永遠の敵對關係に立つているものではない。既に原始社會ではそれは特に近親交配による種の絶滅の危險を防止し人口增殖力を健康化し强化するためにこそ必要なものであつた。たゞ技術の進歩と表裏した階級社會の發生とその階級的對立の深刻化と共に倫理性も亦階級的葛藤を餘儀なくせられ、そして遂には倫理性そのものゝ退化と弱體化とをさえ結果せざるを得なくなつた。そのような史的展望の上からカウツキーは階級社會の廢絶後の社會主義的社會における人倫的道德性にその異常な强化と人口現象に對する唯一最善の規制者たる力とを期待するのである。

要之、カウツキーの人口論は人間の自然的妊孕力と生活空間擴大過程の間に存在する本質的な乖離と不相應の傾向を力說する點においては極めて現實主義的かつ悲觀主義的であるが、しかし將來社會における人倫的道德性の强化とその人口規制力としての萬全さを推論する點においては極めて理想主義的ないし樂觀主義的であるといえよう。がこの永い階級社會的葛藤の後に完全せられる人間社會に特有な人倫的道德性は自然生物界を貫く原則的な均衡化的傾向を眞の人間的自覺を媒介として再現し完成するものであるといういみではその全理論を蔽ふ思想傾向は飽くまで理想主義的であり、また樂觀主義的であるといつてよい。いゝかえればその樂觀主義は深刻な歷史的現實意識を媒介としながら歷史的發展の必然的傾向を據りどころとするところの樂觀主義であり、自然主義が人間的善意と努力とに對する惡魔的な敵對關係をしか見ない「自然」自體の中に人間的作爲を媒介として實現せらるべき永遠の課題を洞見しようとする歷史主義的精神をその世界觀的背景とするところの樂觀主義だということもできよう。そういういみで我々は之を社會主義的人口論の一應の體系的見本として推擬してもさして當を失することもないのではないかと思う。（昭和二三・二・一八）

ヘンリー・ウオーレス著「六千萬人の雇傭」

Henry A. Wallace, Sixty Million Jobs, 1945.

黑田俊夫

一、緒言

今次大戰後特に英米に於て完全雇傭の問題が眞劍に取り上げられ立法化までされつゝある事は前大戰後の經濟施策とは著しく趣を異にしている。前大戰後に於て戰敗戰勝何れの國に於ても專ら自國を中心とした復舊或は繁榮の永續を狙つた經濟政策が執られその結果は經濟的國家主義、延いて